

## 谷口ゼミ卒業論文要約

- ・河上 晴香 「フランスの食の空間～家庭の食卓に与える影響～」
- ・楠本 結季 「地球温暖化とどうやって向き合って生きていくか  
～消え行く島ツバルの事例から～」
- ・酒井 絵莉 「競技パフォーマンス向上のために～メンタルトレーニングの必要性～」
- ・鈴木こなつ 「農業体験から学ぶ食教育～環境教育の実践を通じて～」
- ・下村 美紗 「アニマル・セラピーの効果と今後の展望」
- ・竹下 綾奈 「生物多様性の保全のために～生物多様性と人間の暮らしとの共存～」
- ・坪内 友梨 「エコツーリズムと環境教育～持続可能なツーリズムをめざして～」
- ・寺西 里紗 「笑いの力～「笑い」が与える心身への効果について～」
- ・中川 実佳 「健全な食の在り方についての考察～有機農法に焦点をあてて～」
- ・中西 良太 「スポーツにおける教育的・環境的サポートの必要性  
～音楽を取り入れたスポーツ教育の可能性～」
- ・中村 瑞穂 「伝統文化によって守られる人間と環境とのかかわり  
～共生の輪の中に生きる私たち～」
- ・平田 周士 「自然環境の再生を目指す環境教育～自然再生に繋がる行動～」
- ・水野 浩一 「カンボジアの孤児問題から考える教育の重要性～ポル・ポトの悲劇を  
超えていま～」
- ・美間 彩花 「わが国の食生活と健康～健全な食生活を目指して～」
- ・山口 真依 「遺伝子組み換え作物とどのように向き合うべきか  
～消費者の視点から～」
- ・濱口つかさ 「エコロジー思想を基盤とした環境教育の展開  
～環境意識の高揚を促す思想を手がかりに～」

## フランスの食の空間

～家庭の食卓に与える影響～

河上 晴香

### 第一章 食文化の歴史

### 第二章 フランスにおける人と食との関わり

第一章では中世から現代までの食文化の流れ、そしてアンリ 4 世によって運河が整備され、国内外からの商品輸送量が拡大し、キッチンに運ばれてきた多くの野菜や根菜のことについて述べている。

第二章では私がフランス生活を通して感じたフランスでの食空間や、休日の過ごし方を述べ、日本と比較しながら食文化と家族の関わりについて考察している。

私は高校時代、親の仕事の都合でフランスのトゥールという街で3年6カ月の間過ごし、日本とは異なる食の文化に触れてきた。食の文化の違いでまず私が感じたことは、日本の食卓ではそれぞれ食べる分をあらかじめ小皿に分け、自分の席の前に置かれている状態が一般的であるが、フランスの食卓では作られた料理一品分が大皿に分けられるという違いである。フランスでは一つ一つの料理が終わってからでないで次の料理に進まないため、会話を楽しみながら約1時間いすに座り食事を楽しむ。毎日の食卓が交流の場であり、とても暖かい場であった。しかし日本の食卓では時間をかけて食し、会話をするという環境があまりない、と私は今までの経験を通して感じている。少なくとも1時間かけて会話を楽しみながら食事をする家庭はあまりないだろう。この家庭の暖かさはそれぞれの食空間から出てきているものだと私は考える。

フランスでは家族でゆっくりと過ごすことができるように、日曜日は定休日になっているお店がほとんどである。その日曜日に多くの家庭がホームパーティーを開き、友人や親戚を家に招待し会話をしながら食事を楽しむ。お昼に集まり、深夜に解散という日も少なくなかった。平日では、家族が全員揃うまで食事はしなかった。その理由として、フランスは残業が少なく、子供は夜遊びに行く場所があまりないということが挙げられる。日本は余暇を潰してまで仕事、また残業の日々を繰り返したり、子供は塾に通うなどの勤勉な社会である。また子供が遊びに行ける場所が多くあり、夕食でも家族揃うことが難しい環境になってきており、家族がバラバラに過ごす夜が増えてきている。フランスの食卓では家族で毎日ゆっくりと会話を交わしながら食事をするので、その日に悲しいことがあった、嬉しいことがあったなどの子供の様子、人の様子の変化に気づきやすいのではないだろうか。この食卓に居る間の会話を私達日本人も大事にすることで家族の絆を深め、家庭の暖かさを持つことができるだろう。そして家族の在り方が変わってくるだろうと私は考える。

地球温暖化とどうやって向き合って生きていくか  
ー消え行く島ツバルの事例からー

楠本結季

内容

第一章 グローバルな環境問題

- 第一節 地球温暖化とは
- 第二節 海面上昇の現実
- 第三節 ツバルという国

第二章 世界の環境問題への取り組み

- 第一節 京都議定書
- 第二節 京都メカニズムという措置
- 第三節 問題点

第三章 人類の未来

- 第一節 環境先進国から学ぶ持続可能な社会
- 第二節 スウェーデンと日本の比較
- 第三節 私たちにできること

第一章では地球温暖化のメカニズムについて述べ、そして地球温暖化を海に焦点を絞って詳しく考察していく。また、地球温暖化による海面上昇によって被害を受けている国、ツバルの現状についても述べていく。第二章では世界の地球温暖化への取り組みとして、画期的な会議となった 1997 年の京都議定書について、京都メカニズムという問題点も挙げながら述べていく。第三章では、環境先進国と言われているスウェーデンの政策を見ながら、日本と比較していく。比較した上で、これから私たちがすべきことについて述べていく。

競技パフォーマンス向上のために  
～メンタルトレーニングの必要性～

酒井 絵莉

<目次>

- 第一章 メンタルトレーニングとは
  - 第一節 メンタルトレーニングの分類
  - 第二節 音楽の利用によるメンタルトレーニング
  - 第三節 セルフトークによるポジティブ思考
- 第二章 ルーティーンによるセルフコントロール
  - 第一節 ルーティーン的重要性
  - 第二節 プロ選手のルーティーン
  - 第三節 競技パフォーマンスを向上させるルーティーン
- 第三章 競技パフォーマンス向上のために
  - 第一節 怪我を乗り越えるためのメンタルコントロール
  - 第二節 スランプに陥ったときについての考察
  - 第三節 自信の強化とセルフコントロール

私は10年間、陸上競技を通じてメンタルトレーニングの重要性を強く感じてきた。メンタル面は、競技の結果を大きく左右する。スポーツをするにあたって、緊張感やプレッシャーなどの精神的葛藤に対処するために、多くの競技者が活用している解決方法のひとつにメンタルトレーニングがある。メンタルトレーニングには、それぞれの競技特性や個人の資質などに合わせて、継続すれば効果が見られるものなど様々な種類がある。それらを競技者が選択し実践していくことで、初めてその効果が表れてくる。

第一章では、メンタルトレーニングの種類や活用法などを取り上げて考察している。自身が実践していた音楽の活用やセルフコントロールについて検討し、また、それらの方法を競技前に活用したことによって競技に対する心境はどのように変化するのか言及する。

第二章では、近年スポーツ界で注目されつつあるルーティーンについて論じた。それらは、スポーツ界の外ではまだ認知度は低いと感じる。アスリートにとって、競技前にルーティーンを行うことによって競技パフォーマンスが変わるのかを、プロアスリートの例や自身の体験を交えながら述べている。

第三章では、競技に支障を及ぼすほどの怪我をしてしまった場合に、どのようにして精神面を奮起させるか、どのような思考で競技と向き合えば良いのかなど、怪我を乗り越える方法を、自身の経験などを含めて考察している。

本論文を書くにあたって今一度、精神面の重要性を感じた。これらをスポーツの世界のみならず、様々な状況に対応できる能力へと活かしていきたい。

農業体験から学ぶ食教育

～環境教育の実践を通じて～

鈴木こなつ

はじめに

第一章 健康と安全な食生活をもとめて

第一節 グローバル化時代をむかえた食生活とその問題

第二節 変化する食意識と食行動

第三節 安全で健康的な食生活のために

第二章 食教育の必要性と可能性

第一節 食教育が目指すもの

第二節 学校給食における食教育～伝統的な食文化から学ぶこと～

第三節 地産地消の展開に向けて～食を通じた人と人の繋がり～

第三章 食教育による豊かな人間形成

第一節 食教育の実践例～甲南三法人環境教育プロジェクト～

第二節 心豊かな人間形成のための体験学習

第三節 異年齢交流を通じた心の育み～食教育の充実にむけて～

おわりに

<要約>

私たちの食生活は社会的・経済的要因に大きな影響を受け、ある意味でグローバル化の時代をむかえているが、その一方で問題を抱えている。命や健康を支える食べ物は、日本では食料自給率が低いため多くを輸入に頼る一方で、世界的な食料危機などの問題も多々ある。また、食の安全性や、食習慣の乱れといった食の社会病理的な問題も深刻である。私たちが毎日の食生活の中で出来ることは何か、何を心がければ良質な食生活を手に入れることが出来るのかを考えることが求められている。さまざまな現代の食問題が抱える局面を理解する一方で、それらの問題の解決に向けてできる具体的な手段は、「食教育」を通じた「実践的な体験を行なうこと」であり、その一つに食農体験が挙げられる。農業体験は、命の大切さを学び、自らの生きる力を養い、豊かな人格形成には欠かせない教育であると考えられる。これまで行なってきた環境教育の実践の授業のサポートや、甲南三法人環境教育プロジェクトの企画や支援を通じて、子どもたちとともに実践的な体験学習をすることで、「食」に対する意識・関心の向上を目指していく。

目次：

はじめに	p 2
第一章 人と動物の関わり	p 2～6
第一節 人と動物の歴史	p 2
第二節 子どもたちの発達と動物	p 3～5
第三節 高齢者と動物	p 5、6
第二章 アニマル・セラピーについて	p 7～13
第一節 アニマル・セラピーの歴史	p 7、8
第二節 アニマル・セラピーの分類と効果	p 8～11
第三節 日本と欧米のアニマル・セラピーの違い	p 11、13
第三章 アニマル・セラピーのさらなる発展のために	p 13～16
第一節 現状と課題	p 13、14
第二節 アニマル・セラピーを広めるための活動	p 14、15
第三節 アニマル・セラピーのこれから	p 15、16
おわりに	p 17
参考文献	p 17、18
引用文献	p 18

第一章では人間と動物の関係、動物が人間に与えるプラスの影響、第二章では動物介在療法について詳しく取り上げ、実際にアニマル・セラピーを行っている施設にインタビューした。第三章では現在のアニマル・セラピーの現状と課題をあげ、さまざまな意見を取りあげながら、アニマル・セラピーの今後について考えた。

生物多様性の保全のために  
—生物多様性と人間の暮らしとの共存—

竹下綾奈

はじめに

第一章 生物多様性の創出

第一節 生物多様性の成り立ち

第二節 生物多様性のめぐみ

第三節 生物多様性の価値

第二章 生物多様性の危機

第一節 生物多様性の現状

第二節 人為的原因による危機

第三章 生物多様性の保全にむけて

第一節 生物多様性の保全

第二節 生物多様性保全と持続可能な利用

おわりに

<要約>

今日見られる生物の多様性は、生命が誕生してからの数十億年という時の流れの中で、生物間において相互作用を通して影響し合い、地球生態系に生じてきた。現代の地球には、認知されていない生物も含めると、何百万種とも何千万種ともいわれる生物種が存在しているといわれている。しかしながら、近年人間の生活水準の向上により、生物多様性に悪影響を及ぼしている。人間の生活において、食料、水、燃料、木材などは重要な資源である。これらは生物多様性のめぐみであり、多様な生物が関わりあう生態系によって支えられているものである。これらを喪失させてしまうことは、人間の生活にも何らかの影響を及ぼす可能性がある。人間の豊かな暮らしのためには生物多様性を良好な状態に保つ必要がある。

第一章では、生物多様性とは何なのか、また生物多様性と人間との関わりについて考えながら、生物多様性の重要性について考えていく。第二章では、生物多様性の現状について触れ、人間の行為が原因で生じている危機を明らかにしていく。第三章では、生物多様性の保全と持続可能な利用のための取り組みについて考え、生物多様性といかに人間が共存できるかを調べていく。

エコツーリズムと環境教育  
～持続可能なツーリズムをめざして～

坪内友梨

はじめに

第一章 エコツーリズムの功罪

第一節 エコツーリズムの定義と理念

第二節 エコツーリズムの歴史と現状

第三節 エコツーリズムの限界

第二章 エコツーリズムと環境・地域・文化

第一節 エコツーリズムと環境保全

第二節 エコツーリズムと地域復興

第三節 エコツーリズムと文化保全

第三章 エコツーリズムを支える環境教育プログラムの提案

第一節 森林環境教育プログラムの事例より

第二節 ユースホステルの利用を通して

第三節 エコツーリズムと環境教育～原体験の大切さ～

おわりに

近年では、旅行業界の中でも自然をテーマにし、自然体験に特化した旅行プランを立てる旅行会社が増えてきている。知床、白神山地、小笠原諸島、屋久島など、日本国内においても世界自然遺産に指定される美しい自然景観とともに、豊かな生物多様性を観光できるスポットが着目されている。素晴らしい自然に足を運ぶツーリストが増えている一方で、一度にたくさんのツーリストが訪れることによって破壊されていく自然があることもまた事実である。その対策の1つとしてエコツーリズムがある。本論文では、エコツーリズムがどのような役割を担ってくるのか、また推進していくことによって、どのような環境インパクトや恩恵があるのかについて考える。そして、エコツーリズムを成立させるためには旅行者や地域の住民、インタープリターなどを対象にした環境教育が重要な役割を担うという点について、そして子供の頃の原体験の大切さについて論じている。



## 笑いの力

～「笑い」が与える心身への効果について～

寺西里紗

### 【目次】

はじめに	p.1
第一章 身体的効果	
第一節 笑い と NK 細胞	p.2
第二節 笑い と 健康	p.3
第三節 笑い と 医学	p.6
第二章 精神的効果	
第一節 笑いによる心の動き—笑いのワークショップ—	p.8
第二節 笑い と ストレス	p.10
第三節 笑いがもたらす心的健康—「笑いヨガ」の効果—	p.12
第三章 能力に及ぼす効果	
第一節 笑い と 遺伝子—遺伝子が人間の可能性を広げる—	p.14
第二節 笑い と 潜在能力	p.16
第三節 笑いで日本を元気に	p.17
おわりに	p.19
注・参考文献	p.20

### 【要約】

現在、「笑い」が人間にもたらす効果への関心が高まってきている。「笑い」は、身体的効果だけではなく、精神的にも良い効果をもたらすと言われている。また笑うことによって、様々な分野での能力開発につながるということも、近年の研究で明らかになっている。

そこで、本当に「笑い」が身体的、精神的、また能力に影響を及ぼしているのか、また影響を及ぼしているとしたら、どのようなメカニズムで笑いが効果を及ぼしているのかという疑問が芽生えた。

本論文では、身体的、精神的側面において、また自分の能力を開発するにあたって、「笑い」がどのような効果を私たちにもたらしてくれるのかを論じる。その際、過去の実験や自分自身の体験もふまえながら、「笑い」の効果をどのように活用していけば、よりよい人生を送ることができるのかということについても考察する。

## 健全な食の在り方についての考察

～有機農法に焦点をあてて～

中川実佳

はじめに

### 第一章 農薬がもたらす影響

第一節 農薬の現状

第二節 農薬による環境汚染

第三節 農薬と健康被害

### 第二章 有機農産物に焦点をあてて

第一節 有機農法の推進政策

第二節 自然農法の取り組み

第三節 有機農産物の課題

### 第三章 健全な食の在り方とは

第一節 ゼミナール活動での有機農法体験を通して

第二節 消費者の選択

第三節 これからの農業

おわりに

### <要約>

現代社会において化学物質の利用は、私たちの生活を豊かにし快適にすることに役立ってきた。各家庭の食卓には豊富な食物が並び、日本における食生活も大きく改善されたように見える。しかし作物収穫のために散布された大量の農薬などの化学物質には、発がん性や毒性を含むものも多く存在するといわれ、人体への影響は大きい。海外で使われている農薬の中には、日本で販売や使用が禁止されているほど危険性の高いものもあり、これらの農薬が散布された食品は輸入によって簡単に国内に流通し、私たちは知らないうちに体内に取り入れてしまうこととなる。

私はゼミナール活動で実際に有機農法を体験してきたが、そこで栽培された農産物には普段スーパーで見かけるものとは色や形に違いが見られ、虫食いなどの跡が目立つものも多かった。しかし無農薬という安心感は私の中で大きく、見た目の美しさに変えられるものではなかった。農薬によって低価格で美しい食品を生み出すことはできたが、安全面を考えると農薬は万全とはいえないだろう。

本論文では健全な食生活を見直すために、まず第一章では農薬が人体や環境へもたらす影響を毒性的立場から述べていく。第二章では有機農産物の必要性和そこに存在する課題を

明らかにしていく。第三章では自身の有機農法体験をもとにどのような食を選択するべきか、また今後の農業はどう発展するべきかについて考察を行っていく。

スポーツにおける教育的・環境的サポートの必要性

～音楽を取り入れたスポーツ教育の可能性～

中西 良太

目次

はじめに

第一章 スポーツ教育の意義と課題

第一節 スポーツの意義とは

第二節 教育的サポートの必要性～体罰問題をめぐって～

第三節 環境面からのサポートの必要性

～子どもの体力低下の問題をめぐって～

第二章 音楽が与える心身への影響

第一節 音楽によるリラックス効果

第二節 スポーツと音楽の関係性

第三章 スポーツ教育の充実のために

第一節 音楽を取り入れたスポーツ教育の考察

第二節 今後のスポーツ教育の取り組み

～生涯スポーツの必要性～

おわりに

引用文献

参考文献

今日、日本のスポーツ教育の現場は、様々な問題を抱えている。例えば 2013 年大きな話題となった学校教育における部活動での体罰がある。その背景には、スポーツが勝ち負けのこだわりにつながっている体制があるからではないかと考える。また近年、新聞・ニュースでも多く取り上げられている子どもの体力低下の問題など、今の日本のスポーツ教育の現場を取り巻く環境は非常に厳しいものである。そのため、スポーツの意義を再確認し、音楽を用いた教育的・環境的サポートの必要性について、私が 18 年間続けてきた水泳というスポーツの経験を踏まえながら考察する。

また本論文では、スポーツ教育の現場における指導方法の 1 つとして、音楽療法について注目し、音楽を取り入れたスポーツ教育が有効であることを考え、スポーツ教育の可能性を追求していく。

伝統文化によって守られる人間と環境とのかかわり～共生の輪の中に生きる私たち～

中村瑞穂

目次

第一章 東洋における自然と人間とのかかわり

第一節 東洋の多様な自然観

第二節 地域によって異なる自然への認識～自然とつながっていた人間の暮らし～

第二章 豊かな自然に育まれてきた伝統文化

第一節 自然と切り離せない伝統文化

第二節 伝統文化と環境とのかかわり

第三章 多様な文化と共生の思想

第一節 マルチカルチャーと持続可能な文化

第二節 共生の輪に生きる私たち

第一章では、東洋的な自然観が西洋的な自然観と比べて、いかに自然と浸透し合い生きて  
いるかを述べ、第二章では、東洋の自然との繋がりを持つ伝統文化がどのようなものがあ  
るか例をあげながら述べ、その伝統文化が環境を守る要因になることを述べる。

第三章では、モノカルチャーとマルチカルチャーを比較し、多様な文化が共生には必要で  
あることについて述べている。

## 自然環境の再生を目指す環境教育

### ～自然再生に繋がる行動～

平田 周士

#### 目次

#### はじめに

#### 第一章 地球環境問題

##### 第一節 自然環境問題－森林破壊・気候変動－

##### 第二節 社会環境問題－公害問題－

##### 第三節 人体に及ぼす影響

#### 第二章 高度経済成長がもたらした変化

##### 第一節 日本の社会問題としての公害

##### 第二節 生活の変化

#### 第三章 自然環境の再生を目指す環境教育

##### 第一節 環境教育による原体験の育成

##### 第二節 身近なエコ活動

##### 第三節 自然再生に繋がる行動

#### おわりに

#### 参考文献

近代における科学の発達は私たちの生活に多大な変化を与え、生活は快適になった。しかし、二酸化炭素の濃度の増加によって引き起こる地球温暖化などの環境問題によって、生活に被害を受けるようになった。だが、その事実は人々の間で十分に理解されていない。環境の再生を目指す上で、環境破壊や汚染の原因を述べながら問題解決への道を探していく。

第一章では世界的な環境問題の酸性雨、社会環境問題で挙げられるゴミ問題などの環境破壊によって私たちが受ける被害や問題について述べ、第二章で日本人の生活の変化によって起こった公害問題、特に高度経済成長期に起こった問題を、エネルギー問題に触れつつ考察し、第三章では、環境汚染を止める事のできない人間が何を考え行動していけば良いのかを論じる。

## カンボジアの孤児問題から考える教育の重要性

～ポル・ポトの悲劇を超えていま～

水野浩一

大学三回生の夏、私は 20 日間カンボジアのプノンペンとシェムリアップを訪れた。発展途上の国を訪れるのは初めての経験だった。首都プノンペンに到着すると、そこは私の予想を超えるほど、開けており、目を疑った。交通は決して整備されているとは言えないが、コンクリートの道路が敷かれ、多くの日本製のバイクや車が通っていた。また、街は屋台や市場で賑わっており、カンボジアを流れる二代河川、トンレサープの川沿いはレストランが並び、平日の昼間だというのに、ボール遊びやダンスをする老若男女で賑わっていた。人々は皆あたたかく、フレンドリーで私たちも彼らに混ぜてもらい楽しい時間を共有した。すれ違う人々は目が合えば笑顔を返してくれ、「とても幸せそうで生き生きとしている人が多いな」というのが最初の感想であった。カンボジア人は日本人にはない素朴さをもっており、私はこの国の国民性と穏やかな景色に魅了された。

しかし旅をすすめるうちにそれはほんの断片にすぎないことに気付かされたのであった。日本支社もある「礎の石孤児院」、日本語学校、ポル・ポトの歴史を語るキリングフィールド、内戦を語る WAR ミュージアムを訪れ、また縁あってカンボジアの大臣チェットチリー氏 (ChetChealy) との対談からカンボジアの孤児の現状、悲惨な歴史をお聞きする機会に恵まれるとともに、目の当たりにすることになった。また、一步都心を外れるとなんの整備もされていないスラム街で、物乞いをする少年少女や妊婦、道端で麻薬や人身売買をする人々。豊かな国で両親に育てられた私にとってこれらの光景は目を疑うものばかりで、真の豊かさとは何か、深く考えさせられた。

私はこのカンボジア訪問でこの国が持つ多くの魅力とこの国の抱える多くの問題点の両局面を目にし、また経験することになった。めまぐるしい発展で注目を集める今日のカンボジア。これからより良い発展を遂げるためにはどうすべきか考察したく思い本論文を書くに至った。

まず第一章では歴史的背景からアプローチし、カンボジアの歴史に大きな影を落としたポル・ポト政権が、今日のカンボジアにどのような影響を与えたか理解を深める。

次に第二章では様々な問題の中でも孤児問題に焦点をあて、その現状を考察し、そこから HIV/AIDS 問題、雇用問題、貧困問題等の問題を浮き彫りにしてゆき、自身の孤児院でのボランティアの経験を織り交ぜながら、孤児問題と国家がどう関わっていくべきかを考察する。

上を踏まえて、第三章では、私がこれらの諸問題の改善にむけて必要不可欠であると感じた教育の重要性を述べ、初等教育の普遍化の達成のためにはどうすべきか考える。

わが国は戦後の“食料窮乏期”で飢えをしのぐことに悪戦苦闘した敗戦直後から、およそ60年という期間に目覚ましい発展をとげ変化した。私たちの食生活は、高度経済成長による生活水準の向上によって、「飽食の時代」と言われるほど豊かになり、環境の変化に伴って食事のスタイルも大きく変わってきた。時間や場所を選ばず、好きな時に好きな食べ物にアクセスできる環境が整い、また、核家族化や高齢化が進み、女性の社会進出が増えたことから、手軽で簡単な食事や外食をする人が多くなった。その一方で変化したライフスタイルが要因となって、食生活は不規則になり、偏った食事をする人が多くなってきている。さらに食が洋風化したことで高カロリー、脂質の過剰摂取となり、栄養のバランスが崩れ、それが原因で肥満になるばかりでなく、糖尿病やがん、心臓病などの生活習慣病が蔓延する事態となっている。私たちの目の前には、食生活をめぐる様々な問題が山積みとなっている。これを解決するためには、食生活を見直すことが必要であり、食育の推進が重要な課題となってくる。食育とは「生活上での基本であって知育・徳育・体育の基礎となるものであり、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てること」だとあるように、私たちは食に対する知識を身につけることが大切である。食習慣の形成は、子どもの頃の習慣が影響すると言われており、子どもの頃から正しい生活習慣をさせることが大事で、子どもの頃の食育が重要となってくる。大人は、子どもに対して食育を実践していく責任があり、そのためには、個々の家庭を中心としながら、学校や行政、地域の諸団体のサポートによって、地域全体で食育を進めていく必要がある。さらに、私たちの食への関心が高まる一方で、食の安全が脅かされ問題となっている現在、その地域で採れた産物をその地域で消費するという安心感の強い地産地消運動も広がりを見せている。

食生活と健康は密接な関係があり、健全な食生活を送るためには、規則正しい食事のリズムを取り戻し、栄養バランスが偏らない食事をするのが大事である。1日3食の食事を摂り好ましい生活習慣を形成することが、健康にもつながってくる。食生活の見直しは、他人から与えられるのではなく、自らが取り組む課題であり、自分の食生活を振り返り、自分なりの健康目標を立てることが重要である。

遺伝子組み換え作物とどのように向き合うべきか

～消費者の視点から～

山口真依

近年、スーパーでは輸入食品が驚くほどの安さで売られている。しかし、スーパーで売られる作物の一部は、GM技術を用いて遺伝的性質を人工的に操作し、品種改良が行われたGM作物である。これらの作物を開発することには一体どのような利益があるのだろうか。また、実際に環境や人体に与える影響とは一体どのようなものなのだろうか。GM作物の実情を踏まえたうえで、消費者の視点から、今後GM作物とどのように向き合っていくべきなのかについて消費者の視点から考察する。

はじめに

#### 第一章 GM作物を肯定する立場について

第一節 世界における普及

第二節 アメリカのアグリビジネスの実情

第三節 GM作物肯定論

#### 第二章 GM作物を否定する立場について

第一節 GM作物否定論～「予防原則」を基軸にして～

第二節 環境に与えるリスク

第三節 身体への

#### 第三章 これからのGM食品との付き合い方

第一節 GM作物の新たな開発に向けて

第二節 日本での現状～TPP 問題とのかかわりから～

第三節 消費者として何が出来るのか～「商品の選択能力」の育成に向けて～

おわりに

脚注・参考文献



エコロジー思想を基盤とした環境教育の展開  
～環境意識の高揚を促す思想を手がかりに～

濱口つかさ

現在、日本に住む私たちは“人並み”の暮らしを送っていると思っている。この“人並み”の生活様式を振り返ってみると、大量の資源を使用し環境を汚染している。しかし、こうした現状に対する私たちの自覚は低いのではないだろうか。そこで本論では、東洋的な考え方がもつ視点から環境を捉えなおすことによって、その精神性が環境意識へどのように導くのかを考察した。まず、第一章では「豊かさ」の問題から資本主義がもたらす人間の欲望と経済のつながりを明らかにし、人々の価値観が精神的なものから物質的なものへと移行していった要因を考えていく。次に、第二章で人間と自然の関係性を中心に、東洋の考えに支えられた自然観について述べていく。また、南方熊楠の神社合祀反対運動の事例を用いて、自然の生態系が引き起こす社会生態系の影響について述べていく。第三章では、人間と自然の共生を目指して、エコロジー思想を起因とした環境教育について考察していく。